

<別紙1>

第三者評価結果報告書

①第三者評価機関名

株式会社R-CORPORATION

②施設・事業所情報

名称：ぶどうの実 久地園	種別：認可保育所	
代表者氏名：堀 晴久	定員（利用人数）：60名	
所在地：〒213-0032 神奈川県川崎市高津区久地4-24-5 4階		
TEL：044-829-6550	ホームページ： https://budou-ki.co.jp/kuji/index.html	
【施設・事業所の概要】		
開設年月日：2017年04月01日		
経営法人・設置主体（法人名等）：株式会社ぶどうの木		
職員数	常勤職員：15名	非常勤職員：17名
専門職員	（専門職の名称）：名	看護師：1名
	保育士：20名	栄養士：2名
	調理士：3名	幼稚園教諭：5名
	社会福祉主事任用：1名	
施設・設備 の概要	（居室数）	（設備等）
	乳児室	医務室
	ほふく室	調理室
	保育室	事務室
		遊戯室

③理念・基本方針

<理念>

『シアワセな未来を創るひとを育てる』

ひとが「シアワセ」であるとは、ひととひとのつながりや広がりやうまくいくことを基盤にします。だとすれば、シアワセな未来を創る“ひと”を育てるとは、ひととひとが豊かにつながり合うという肥沃な土壌があってこそ、一人ひとりが大切にされ、成長の根を育み、希望の種を宿すことが可能になるのです。こうした土壌のなかから、子どもたちは、やがて自ら希望を切り拓き、ひとと共生し、社会に貢献する“ひと”として、芽吹いていくのだと私たちは信じています。『シアワセな未来を創るひとを育てる』ことこそがぶどうの木のコーパース（社会的存在意義）だと考えています。

<基本方針>

1. 一人ひとりを大切にする子ども主体の保育
2. 自ら希望を切り拓き、ひとと共生し、社会に貢献できるひとを育てる

<保育方針>

「勇気づけ」努力・工夫を認めるプロセス・行動に注目

「裁かない」指示・命令・決めつけをしない

「見守る」子ども自らの経験を尊重

<保育目標>

- 一人ひとりを大切にする子ども主体の保育

④施設・事業所の特徴的な取組

<ぶどうの実久地園の特徴的な取り組み>

●保育の質の基本は「子どもと保育者」の関係の“質”が土台になります。どんな子どもであっても、子どもがありのままに受け止められ理解され支援される関係を積み重ねることで、人やその世界は信頼できる存在であるということを中心に育まれることが重要と考え、保育に取り組んでいます。

●「一人ひとりを大切にする子ども主体の保育」の具現化に取り組んでいます。「子どもたちが自ら育つ」を信じて待つという保育の姿勢・在り方を全職員が学び合い、自分のものとして落とし込まれていくことが、福祉（保育）サービスの向上の基礎だと考えています。

●「子どもの姿ベース」のカリキュラムの導入や「主体的・対話的で深い学び」を主題にいくつかのプロジェクト保育に取り組んでいます。こうした取り組みを通して、したいという意欲、できる自分の発見、困難を乗り越えていく力、自他を大事にする他者との関係構築力など非認知能力が将来にわたる生きる力の土台になると信じています。

●さらに、心理的安全性が高い・成功も失敗もオープンに振り返られる・互いの学びや成果が尊重される・学び合うことに喜びを感じられるといったことが、一貫して大切にされる職場づくりと、子どもたちを「シアワセな未来を創るひと」として育む養育と教育が展開される保育が相まってこそ、真に保育の質が高められると信じています。そこから、子育て支援や発達に特性のある子どもや家庭の支援や、地域との豊かなつながりへと広がっていく事業活動を展開しています。

⑤第三者評価の受審状況

評価実施期間	2021年06月10日（契約日）～ 2022年03月08日（評価結果確定日）
受審回数（前回の受審時期）	初回（年度）

⑥総評

【ぶどうの実久地園の概要】

●「ぶどうの実久地園」（以下、本園という）は、株式会社ぶどうの木（以下、法人という）が運営する認可保育園です。法人は現在、川崎市で6園の認可保育園と学童保育を運営しています。法人が設立された平成13年に、地域保育園「チャイルドケアサポートぶどうの実」として開設され、平成25年に名称を「川崎認定保育園 ぶどうの実久地園」に変更し、平成29年に川崎市より認可を受け、現在に至っています。

●法人ではスタッフを「ぶどうの木ファーマー」（farmer）と呼びます。ファーマー（農夫）が畑を耕し、種を蒔き、肥料や水をやり、丹精込めて作物を育てるように、子どもたち一人ひとりの成長を丁寧に育む保育をしたいと願っているからです。保育とは、「子どもたちが自らの未来を創るための成長の根と希望の種を育む営み」と考えています。子どもの未来を見据え、人として自立するために、子どもの「いま・ここで」をかけがえのないものとし、日々質の高い保育を積み重ねています。

●本園は、JR南武線「久地駅」から徒歩約1分と駅から至近の場所にあり、電車通勤の保護者の方々にも大変便利な場所です。園舎は4階建てビルの4階部分を占有し、0歳～

5歳児定員60名（利用人数65名）を預かっています。保育室は、0歳児は専用スペース、1歳、2歳児は発達段階に応じて3つに分けた小グループを作り、保育室内を区切って活動し、3歳～5歳児は常時異年齢合同保育を行っています。子ども一人ひとりの成長段階に合わせた保育に配慮し、0歳～1歳半（種の時期）、1歳半～3歳（芽の時期）、3歳～6歳（苗の時期）、それぞれの成長段階の観点を押さえて保育を実践しています。子ども自身が主体的な《育つ》存在であることを大切に、養育者として《育てる》の実践を展開し、子ども同士・スタッフと親・親同士が支え合い、助けあって《育ちあい》の関わり合いを大切にする保育を目指しています。

◇特に評価の高い点

1. 【子どもが主体的に活動するための支援の取り組み】

●子どもが自主的・自発的に生活と遊びができる環境を整備しています。子どもの保育目標を「0歳～1歳半」・「1歳半～3歳」・「3歳～6歳」に分け、成長の段階に合わせた保育に配慮しています。園庭は有していませんが、身体を動かすことができるよう戸外活動（散歩等）を重視し、多くの時間を確保しています。散歩コースは22コースあり、当日の散歩コースは子どもが主体的に決め、小旅行的に楽しめます。散歩により交通ルール等を学び、友達と楽しい時間を共有しています。子ども自ら「したい」ことを「できる」ための方法を自発的に考え、自主的に達成していくよう、毎朝、「プランボード」で遊びを選択し、決定しています。さらに、年長児が自分たちの街で働くことを目指す「まちをつくっちゃおうプロジェクト」を設定し、子どもたちの育ちと学びの体験プロジェクトとして、職員・子どもたち共々大イベントとして取り組んでいます。また、相互の理解・問題解決力・感情の取り扱いをワークショップで学ぶ「セカンドステップ」を幼児教育として導入しています。そして、異年齢（3・4・5歳児）グループ（トリオ）を中心に「ごちゃどば（異年齢）」で育ち合う保育に取り組む等、子どもが主体的に活動するために、他に類を見ないアイデアと職員の尽力とで取り組む保育は高く評価できます。

2. 【保護者への様々な情報提供と連携】

●園としては「みんなで子育て」をモットーに、保護者にとって保育園が単に「子どもを預けるために必要な場所」に留まらず、「共に子育てしていくパートナー」として相互に信頼し合える関係の構築が大切と考えています。その一つとして、子どもを真ん中に、力を合わせ育ち合う関係作りを大切にするために、「ぶどうサークル」と称した保護者が主体となり活発な意見交換ができる場を設けています。日常保育の様子は、キッズリー（保護者向け写真付き連絡帳アプリ）連絡帳機能（0・1・2歳児）やキッズリーを通しての情報（3歳以上児）で知らせ、保育者と保護者が情報を共有しています。今年度は、新型コロナウイルス禍（以下、コロナ禍という）により、保育室への保護者の立ち入りの制限や、保育参加を実施できなかったため、日々の子どもの様子がよく分かるよう、キッズリーやSNS（インスタグラム）等の活用を含め、写真や記事を発信する等、様々な情報を家庭に詳しく提供しています。

3. 【食育への取り組み】

●給食は、栄養を摂るためだけでなく、楽しい語らいや団欒の場であり、食事のマナー等を学ぶ機会でもあると考え、様々な取り組みにより食に対する興味を育てています。子どもの成長に合わせた食事提供を行い、「自分で食べたい」という食への意欲の芽生えを自主性・自発性を育む大切な時期と捉え、大らかに食事の指導、対応を行っています。自園調理による昼給食、手作りおやつを提供し、給食はだし汁を基本に和食中心の4週間ごとの献立になっています。食材については、米は秋田・山形産の「分つき米」を

使用し、魚介類・季節の野菜等は信頼できる地元業者から仕入れる等、安心・安全な食事を提供しています。また、旬の食材、季節や行事に合わせた献立を取り入れ、子どもたちが楽しんで食事ができるよう、食育に力を入れています。3歳以上児は、子ども自ら米とぎ等の手伝いを行う機会や、盛り付けは幼児の当番制とする等、積極的に食に関わり、食事開始や食べ終わる時間も一斉とせず、食べるテーブルや一緒に座る友達も自分たちで決めています。検食については、検食簿を記録するだけでなく、検食サンプルを2週間分保存し、食品衛生管理にも十分配慮しています。

◇改善を求められる点

1. 【園児と地域との関係確保のための取り組みについて】

●子どもが地域の人々と交流を持つことは大切な取り組みテーマと考えています。子どもが地域活動に参加するように心がけていますが、コロナ禍の中で機会が減っています。本園は、地域資源の一つとしての立場を意識して、園としてできる事・やるべき事に取り組んでいます。法人では、3つの事業部会があり、「子育て支援部会」では全ての家庭が支援の対象であり、「ぶどうピース活動部会」では当たり前誰かの役に立つ活動を実践し、「マオポポ活動部会」では発達に支援が必要な子ども・家族に対する理解・支援を行っています。地域の福祉ニーズに基づく活動に取り組むことで、地域の子ども育成支援は行われています。今後、園児と地域の交流を広げるため、自治会等との交流の機会を定期的に設ける等、地域コミュニティの活性化に取り組んで行かれることを期待します。

2. 【職員の育成に向けた取り組みと業務の標準化】

●必要な保育士・調理師等の人材体制について、基本的な考え方で運用され、職員配置を十分に行い、働きやすい環境を構築することで職員の定着率が高くなっています。年1回、自己評価シートによる評価を実施し、互いの学び合いや意識の向上につなげています。今年度は、園長・主任等のリーダー層に対して、能力×人間力をコンセプトにした「七つの習慣」をベースに研修を実施し、職員一人ひとりが人間として成長するための「七つの習慣」Web研修も開始しています。また、教育的プログラム「セカンドステップ」を実施し、対人関係スキルの向上に取り組んでいます。業務が多様化している中、今後、業務の効率化と職員の習熟度に配慮したOJTを継続していただきたいと思えます。また、職員の専門性や成長を評価し、納得できる評価制度を構築することで、職員が自らの将来の姿を描くことができるような総合的な仕組み作りが課題になると思われます。一方、業務の標準化と適切な福祉サービスの実施のため、様々なマニュアルを整えています。業務の標準化と保育士の育成のため、定期的にマニュアルの見直しを実施し、マニュアルを整備することで利用者本位の福祉サービスの提供につながることを期待いたします。

⑦第三者評価結果に対する施設・事業所のコメント

施設名： ぶどうの実久地園

施設長： 堀 晴久

<評価（自己評価等）に取り組んだ感想>

「ぶどうの実久地園」は、今年度で開設20周年になります。現在の「ぶどうの実久地園」は、平成13年の10月に、前身である「チャイルドケアサポートぶどうの実」という名称で無認可保育園としてスタートしました。園の由来には、子どもを育てる（チャイルドケア）職員や、親である保護者をサポートする場になることを目指そう、という意味

を込めていました。そして、地域に根ざして「子どもたちが未来に向かって健やかに育つこと」を真ん中にして保護者・職員・園が一体になって、「育つ・育てる・育ち合う」という関係や、つながりを創って行きたいという願いと想いがありました。

認可外の時代には、発達に特性があって集団に適応出来ないで幼稚園等からはじかれてしまった子どもたちや、子育てで行き詰まってSOSで飛び込んできたママたちが、いつでも利用出来る受け皿としての

役割を、地域の中で果たしてきました。認可化する時には、そんな役割が果たせなくなるのでは、との声も多くいただきました。しかし、私たちは、働く職員が安定した生活保障の中で結婚して、子育てしながら働き続けられるために、認可化という選択をしました。それは、職員が定着することで、保育の質を確保するということでもありました。

こうして、「ぶどうの実久地園」として認可保育園になったのは、平成29年4月です。実は、認可になって5年が経ちましたが、第三者評価を受審するのは今回が初めてです。乳・幼児期という「いま」をどのような環境の中で、どんな経験を刻んで行くことで、子どもたちが「自らシアワセな未来を創るひと」になるための、生きる力の土台を育むことが出来るだろうか？この20年間の歩みの中で模索し、考え合い、そのための保育のカタチを創ってきました。

「ぶどうの保育」は、「濃くて、熱くて、温かい」と良く言われます。そんな「ぶどうの実久地園」の第三者評価を株式会社R-CORPORATIONにお願いしました。第三者の視点で、私たちの園運営や、保育の内容や職員の保育への在り方や姿勢を、ありのままに評価してもらうことで、気付かなかったことや、至らなかった点等をフィードバックしてもらえたことは、貴重な見直しの機会になったと感謝しています。

第三者からの評価を受ける中、担当者からの質問を通して、「地域を大事にする」と言っているながら、最も身近な地域の町会とのお付き合いが出来ていないことや、作成されている各種のマニュアルが棚の奥に仕舞われて、いざという時に活用出来るように、定期的に職員に周知されていなかったこと等、ハッとすることや、気づきや発見が多々ありました。今回、浮き彫りになった課題については、謙虚に耳を傾けて職員と共に地に足をつけて話し合い、改善につなげて行きたいと思っております。

「ぶどうの木」は、他の木がなくとも1本で実をつけ、その「ぶどうの実」は土壌によって数十種の様々な味や色を醸します。子どもたちも、「ぶどうの実久地園」を通して、将来の可能性の彩りが「実」となり、成長して行かれるのですね、と評価機関代表のコメントをいただきました。

私たちは、持続可能なより良い社会の実現に向けて、多様性や包括という概念がキーワードになると思っています。今年も就学に向けて巣立って行く子どもたちがいます。この子どもたちの数十年後が楽しみで仕方ありません。これからも、「ぶどうの実久地園」での子どもたちの乳・幼児期の育ちと学びが「シアワセな未来を創るひと」として、生きる土台になるような保育を職員と共に創って行こう、と気持ちを新たにすることが出来たことを改めて感謝しております。

⑧第三者評価結果

別紙2のとおり